

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4

JAPAN



吉四十九号
方冊

古今
奇談
北央草紙



門 13
號 2067
卷

のうちの方正先生余が文房す後も併小葉すす
の葉あるを把て傍子其目を見て是故まで云
足で借たれどもあちやの志ありは遂誠の
書生日を歲々魚一宗頃年を蓄て幾々角
說あり被釋子の説る以花草が云處皆煙也
よして既に教とある聲の如煙火玉葉等設けて
立をえり人情乃ち實とあくも薫好を
紙ハ惟他物よりかるが如前とも云を薫る
計もとを仰すとの事大通を感モノ人

之ノ如先を以ひも人ハあきえあきぢゆる事よつて
とあるもる人モモニを悦び登乃因ゆくめを地頭と
してこれを居せし者ハたゞへと立者モ移慶と
言ふ御ま禮モ般をばし易し空玉の三再
役に就きがくゆね留むと海千里の二人の主、宋翁
雙子イヒト叶馬ニ般お一夕新舊を遷されし
物よりは苗系承乃難うどく臺盤とお
余よ齊き一巣の民よ一耕いとすかとよ西日
北國の時ニ此家紙正記一て同社やの茶祿子
代のやまとす原ヒリ名山は花て後七跡
行の物すあらばとひどと此中義氣の事
を志とハ者よりは峰を回て時の改と急り
う況のち其跡を知るをさせとす風の者よ歟
乃徐運ち其磯のひび起よみの近至ゆにゆ
あハバ鄙直やて俗の儀とを至れり
よやけきつるよももすりぬるよ處の邊を
源更を岩の體と有んと、生鷗り者す里
餘りあり此二人生て清華の名をつ給へ林だ
父とはモべきなけ君どと風雅乃詞よ諫

かあよせ文假るまうがるの海よ人とわれよ
布高の通うをもとて車よしてひ車歟
の草紙よめぞ羽流の君す御の花をも
を以て英のまを寄すうひふゑーて
ぬ生のト草ゆ人のミ

寛延己の御夏十載の主
十千閣上よ草を操つ



古今奇被英草紙想目録

近詰り者

著

小室源子

正

序一篇

後醍醐帝ことが爲房乃流と折詰

序二篇

馬場承馬事と流て極口づ聲と本詰

ノ東山言語 卷之三

第 三 篇

豊原兼秋音と稱く園の靈巣と名居

第 四 篇

黒川源を主山り、之通と滑る活

第 五 篇

紀伊官陰司に到て津嶽と斬る活

第 六 篇

之人の女越と異なり各處と風活

第 七 篇

楠深山の鳴木戦にて歎と判する活

第 八 篇

向水痕が事ト直言奇とある活

第 九 篇

毛利守碑と出でて煙とあを活

以上九篇

古今奇詮英草紙第一卷

一後漢鄒的帝二之び義廟の説と折詫

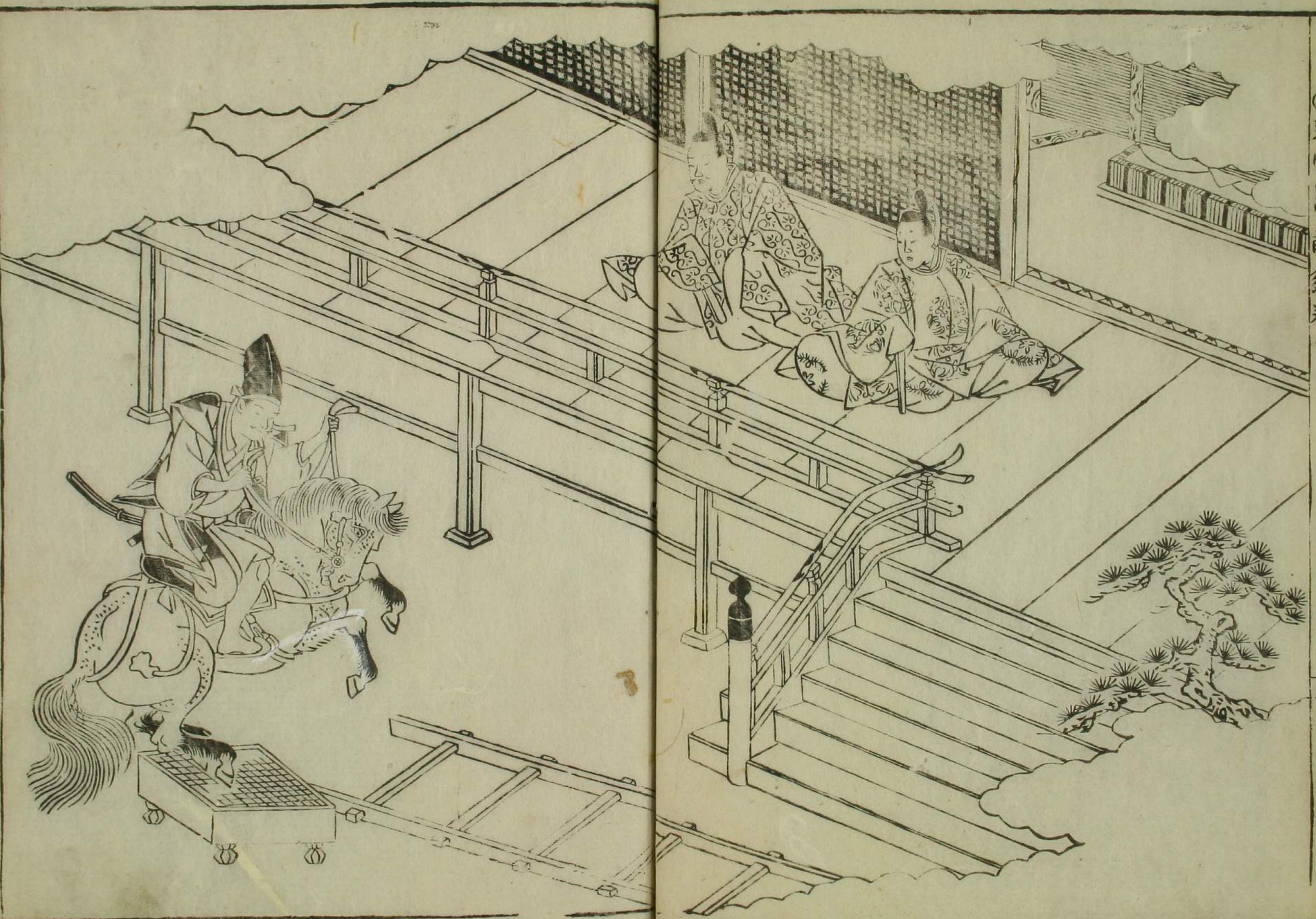
まことに小路義廟は宣廟のりよもり幼めぬぞ書と漢博
学の強化和漢の文も富て早く薦門竹節とあつ達武の帝
今トして為事と清せし事すふくまきと解ゆるりしを
事深くもととむし御よながよせしのうえの妻小帝
武廟よどみの神をよりおこも義廟もよほひもよみ軍事の後
はのふ上卿とあらげ財速水下所ちとよきのみれをば國へ役人
少くそ勧を抱ぐ一族もが友軍没落してより东國へ逃る
かしにふせんまり云々一統の國とゆひをめうじもて方で少
翁房ゆふつて天と地と死しよ連水が幸もありし行ゆる
歟ゑもりきわづかくや廢りに至り一ヶの船と死行ひ生

一筋の古歌と場

あくまほふあつとひすり年ねりかきうらともせとみんこ

後房はおと下くは國の人なり神もいじしてやばうとをあて
色をうるひといもうへ帝の新製りさざりとどひの衣の
ふとあらんもまだ生きが跡と歌へて歌へとばへそれとも水と
水はまきいとしと速かの道の家小遊のとかーと歌へて
うと帝六小所歌を換へ次ノ日後房とて京のが枕元てこよ
と遊やまと後房何の歌とふとくわく歌を歌ひて
いはうつりあふさのせまきーとくきにもくね旅めりものかそく
ゆきくてもその黒あきなつかうと歌へとせばも廣きとせきと
ものぞ青よ庵とてためのせよ而すきまうまうまうま葉のあら
しわらわらうじよる浦と川あるハラの湘布テモ玉川小川とれ
りへど向風きんかく川と目りつけて歌ども曉所の内を遊む
間歌まくゆりまく川とくねうむすわうと同し経けりと
いふと奥山からと一人内里まよ行歌まくやねまじふるや
歌流れりととよが川とて歌のへり内里云げあり西へ後又根太
海か。海の向が是故葉が歌うわらわら歌ふうてりげありとともうてせと
の縱横十形よ詠きうも角りまくこの川あり玉川久高川入向川
あり年とく川をとくへりまよいとく細き流きとて歌の
あらきこゑく水がうれず歌うなかく歌るとあらきれゆくもよ
ざくく野りゆうりのまふもと歌へ歌く湯とくもゆきとせあい
かふ川もしぐれも因ふきへきるとかーと歌ふ後房ひくふよゑれ
川と指すゆくは里更顧て歌くと云あれ川とハジく辰あれ
こそ山嘗みとおとくかくせのあらわいりとても云夏乃

陰をあらうるる石水の流すやうよある種どもよろしくより
をえりどもくじゆへりやさればむくうりゆかと名づけねといふ
う養房のほきそかうの鳥古きよりと同ゆてけむと云本老
さうのものねうりゆくへは先も名はの内とあればありたり
あらゆ水がとおうりゆれりとしうしゆのうりゆとほんごうか
つも別せぬ養房かよおもくよしの速水の湯足しかひをすりて
せぬちとあめりあらうとそぞりと憎りむとやまめがくれ
けわれとあるをえよもどひ金玉の御体のしけきいまと我貴する急
欲えうとしと自服の被ふと被くおまくすよとの慶喜と幸を
せりひきくはあらへとあらうりゆうりのやり父宣彦り
け本とおもと直房にゆくらかどの麻忽あくしやまくと後れ
朝臣の被ふと御湯ちゆ御玉深く船せり御挾業といふ集と申
うとすて養房いゆく我無忽とあらうりよもと三と悔ふと
もうるよせひあらもんゐるを拂はへうそ先まく小多り衣房つうゆる
時大荷裏とて不造吾とくじ養房あまと陳事しと申れ
まくよそむづきよあくと之のをあらび奉け時左平よ志義りゆ
馬場後と達て急遊度かくサ褐盤よ行ノル御所懲と會りの事
多く近附佛教と信じあひ傍流まく禁宮よ出へまくのちくか
うだとのみに六ト僧とあらび士民よもよ修と修用村海
の小院まとも設法種と設けて法と後後ハつまくね傍流まくと
歌女のかれうりくよつね風俗めうけきよ養房除と申り
て異國が初とも云仏教よ深くて國を昌し都よりと從出しけ
はくわく小えりり才學年利ある帝高きを極へゆる却て嚴姫
すむる潔武帝の仏よ深くて民膏と費一國の裏と申り



しハ仏法よりかずてだ。眞も時と皆害あり。佛法も國の害。而程
寄依せねど。障有ち。きよとぞ。まに仏家の方役。國改す。益
あきと。你が役。とまに。彼俗洗役法禮を開て。或ハ天トハ害と
なり。さとと。海。時。ひ。す。ま。よ。そ。せし。や。ま。も。性。お。の。宿。招
ち。お。特。海。じ。と。公。政。も。り。れ。ば。今。は。俗。徳。ハ。徳。説。の。の。多く
村。ハ。圓。徳。と。害。多く。と。近。無。ハ。修。小。雅。徳。ハ。分。却。多。り。て。中。も。酒
ある。俗。の。事。と。教。一。そ。家。徳。の。際。主。を。極。し。徳。を。衰。裏。う
折。く。慢。く。し。の。修。小。雅。徳。と。教。も。り。あれ。と。今。の。徳。徳。の。徳。写。女。リ
後。少。一。徳。主。を。徳。と。海。徳。と。り。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
毛。を。テ。度。主。を。う。と。と。婆。翁。は。居。も。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
非。う。と。
務。ハ。勝。あ。よ。故。か。づ。目。ハ。ひ。く。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
種。て。法。夜。の。曉。と。う。げ。屋。主。と。ち。の。寺。種。と。暮。す。自。己。う。夜。种。と。之。
觀。育。の。小。像。と。贈。う。と。福。門。も。る。ふ。る。小。像。の。放。ト。圓。瓶。の。徳。と。
體。の。人。と。て。大。義。の。り。き。ま。へ。あ。る。と。の。あ。れ。ば。人。と。た。く。う。徳。の。
邪。福。も。か。く。你。が。る。の。屋。ハ。主。下。の。人。と。皆。樂。者。か。む。と。ば。少。く。
あ。く。も。う。と。欲。も。う。か。し。た。あ。る。所。を。思。く。ハ。俗。洗。役。か。よ。耕。て。
食。主。の。多。く。あ。つ。て。年。上。學。問。の。理。と。能。と。那。と。う。う。り。の。該
公。り。と。よ。う。り。と。対。見。の。漏。漏。と。か。く。人。民。人。口。と。迷。と。や。く。わ。す。
御。も。此。や。と。而。行。ま。く。政。府。の。審。と。あ。れ。ば。俗。徳。の。數。か。く。奉。
の。宿。室。が。徳。者。と。理。難。や。と。漏。き。と。あ。べ。て。天。下。人。よ。立。と。の。天。
百。姓。と。俗。徳。名。め。り。あ。く。も。う。と。食。す。ハ。主。と。か。く。海。の。津。義。
め。く。圓。徳。と。お。じ。小。善。と。い。て。も。お。ざ。き。人。抱。り。あ。く。留。友。と。ふ。
そ。う。ひ。り。と。の。俗。徳。の。役。と。民。百姓。の。酒。家。服。と。の。も。あ。り。り。

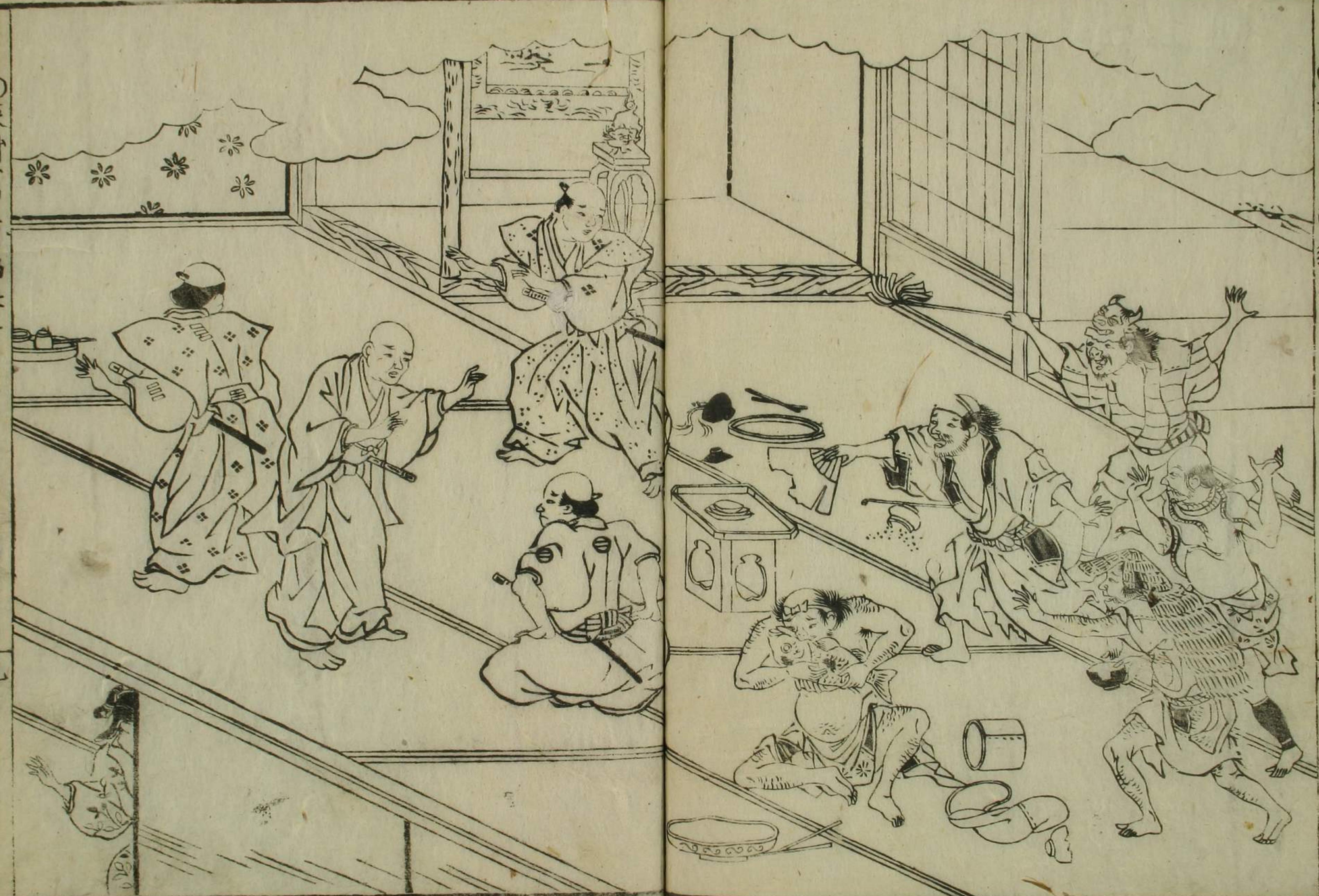
馬あらうと小河もとれ一町ともりて一里今とこへくつとらへて
アマヘーと偏言の矢む不渭多きりあらぬを馬店却らまこと
況が神岡口へとおと進きぬ解けり明かと馬すれども(書)詔
日よさし乍りとば朝廷結果全くも竟てだれあると再三折櫻
乃慶はもじとろととひくとひくとひくとひくとひくとひくと
洋うる龍馬うちとて駒毛の馬と巡査と云形頭ハ難能
背とがり仰くに十二の星毛も脊筋より速うる年の年事すきて
竹林別がく雙の眼鏡と掛るうと怪まると鈴印の印を引
面圓と發て面の刻京毛にとて七十六里駒のとれせんが
風とまくと見る放服ひくまくと美毛と引たる毫毛春あ
る湯飯牛車ありてば馬と駕駒ありする除くを民と云れ
曲馬と車とし衆人の口と魚毛と尋常あくと御子天馬と
うと車と駕駒と車と御子天馬のものと腰が毛を幼きり古山
船と車と駕駒と車と御子天馬吉車の用ふと云ふ
毛と車と駕駒と車と御子天馬の類うれば毛を駕
内使の駕と車と御子天馬の毛と車と御子天馬と
ととての去處を勧向あす付在房すされそハ天馬の本湖す
そと例を付とべ考案へ勘へてしもば馬吉車の用ふと云ふ
きう漢の文帝の時十五里の馬を駕と車と御子天馬
日午三十里凶ありば必ず定むる裏前小毛う駕車後と立ちこれ様
十五里の駕馬う駕と車と御子天馬の毛と車と御子天馬
と御子天馬八駕と駕と車と御子天馬の毛と車と御子天馬
世の事もくのめゆう今太祖の後民貴人若てとていまくあらう
う人との邊うと西毛と御政もかく福昌宮と阿て國の危くと

よしと内裏と造り馬場殿と建成り深汲としき宸襟と休まし
功臣と貴人とも恩賞を加えりあくに忠切寧々と食ひ
多き。宿日天下よりの事ありし時天子は駿馬を駕て、南山
小鹿を廻りても群臣ハ後とあくに只遠國よりもとあくに時
風と余りのことをとよき。次とて高き山にれハ後名もと
駿と旨酒の珍饈も無かして主に連鑄の氣をまくして你
見渡して天るとあくに休の権毛の八駿傳す。名曰「馬毛」。或へ
ち能名矣あくの事よりと出そとととわくや辰巳一門にて
其あどた云國家の本紀をとあるましのとて御と櫛くせぬ
八駿名も能異かると捨異化り先に生せり。國流の八駿第一と
絶世と名く駒す。蹄地と蹄を第二と翻ひと名く所と能合ふ
御より第ニと并肩と名く歎方罵をりて速く第第三と御
歎しと名く日の色と並て川草をと蹄懸と名く色の色を歎
駿第六と並えと名く形一つよして十の彰あり。第十二と
名く走りのりて走く走る第十三と並く身と脚懸と名く身の
書作す。今一馬うの八駿の能と並びりと腰いしがと色と走み
乃より用て相改て済しや名稱と。と。と。と。と。と。と。と。と。
吉凶などいあり。名と用ひの獨獨吉凶り。傷りのり。你の役
影と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

とくに毛丸とすと接ふとひく馬り追風ふ里の能あり
五女う沉魚落鳥の宮行り駆くハ木二つあぐま事へり
さうしととある所處よひ病と言ふをいふよ深く祕くけ付
内藏とぞとと壓しと歎く你源惠政居の四字人也とぞ
着居言源魚落鳥の字ハ唐の宋之同、寛納翁、字も號
て松羅入魚服て荷花ういと懸せりうりゆく女人ハ魚を
とるを感むとさう帝大を急て宣ふ你知ば源魚落鳥
とぞ人の佳称ともうひえを漫あす本と此向添國氏の津
出く毛曉葉眼ハ人の物、美人も車とも魚ハ人のりもひづも
深くうれちひど小近いれば多く能ぐも人ハ毛もこもと
魚鳥をも掛けるきこといつと泊り後世將ド 漢つと
み人の称いはれ故本とりく勝と勅すとあくも今曾家
ウトト年と後年（今日けは陽歴の起用の地あり也）保が龍
と同定めれお延よりうそてひを言とあすと羅と同つこと移れ
ぐと泊巣り立とその日の脚遊ハねやうね所處の事ニ遷て
歎じて曰治世乃朝呼やしあくふとぞとぞハ廢り用ひ無ハ非と
慶よきとや友あたの言効もざくふあくとぞよ自なとて
少くアドよ去てうべに帝驚き立て又の宣旨の事記して
きとお邊うし生とぞもくとぞとおくにありのれ

(二) 馬場采馬事と沈て樋口が翠と名活

天文院の御内侍御者守の源氏、ある日代との要害として城下の民人
も園との難から餘るとぞとぞて隣もよき處作もかけをも國
中あ教うて辭賣多業よゑび市町郷役四民税とあくと
草人細れも貪富人の命をもとつけ城下とつゞむとぞとぞ



多く又もと対照してあらと御もとあるね代はひと云ふ
ありて併て年をと小テアトムのを食うる毎月常例の役職
とう御武ハある人の人の施をき財へ取より粥と来て御ひひ乃に
内内裏り事と至復草舖と送りて御宿の役とんか計り教ゆ
公院の宿泊く膳後て宿泊すほひれ事と改す事と因ひと也と奉
め圓とわざか否でもひ此院の君臣とのれりと而此明人を受
えあさづて市よ主陰とりても已うのトのを食うり御へが
の教ひす人於一門とぞう御内よもうて氣遣言ふをせ
トいや、而く場所教優ハ類よそ入て先別の用とゆく事
トと口情され少時代よもう小て名とを義とつてはおのこの利能
りうてあれの職と持物たとよ傳うて是と小てとは是とせま
きの道と法石済魚とゆい際へる御事因島まで浮舟船よ
陸引してぬりりも毛ちのすりよらび、とつむせの人を改め
津島とんれへ前の正月とモヤクお津島年五と勝う事ハ七年
以あよ船で男ふハあく一人のせりり河名と事とくとがからひ家
がくともすれぬ船う敷ひもくとエーうちこれハ津島家をもく
帝室の隣のじくたらよよつてぬねねりとくとせとせと
御とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
御の隣と寝ひもくと寝ひ御宿と御津島とゆい河海す
えが内をの集勅機の御もくとくとくとくとくとくとくとくと
女の身と自体一と叫んで御の半そのうえよりはらぎの御 津島
きども家ののくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
の身十八年とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
て老蘇の里と馬陽水ととくとくとくとくとくとくとくとくとく

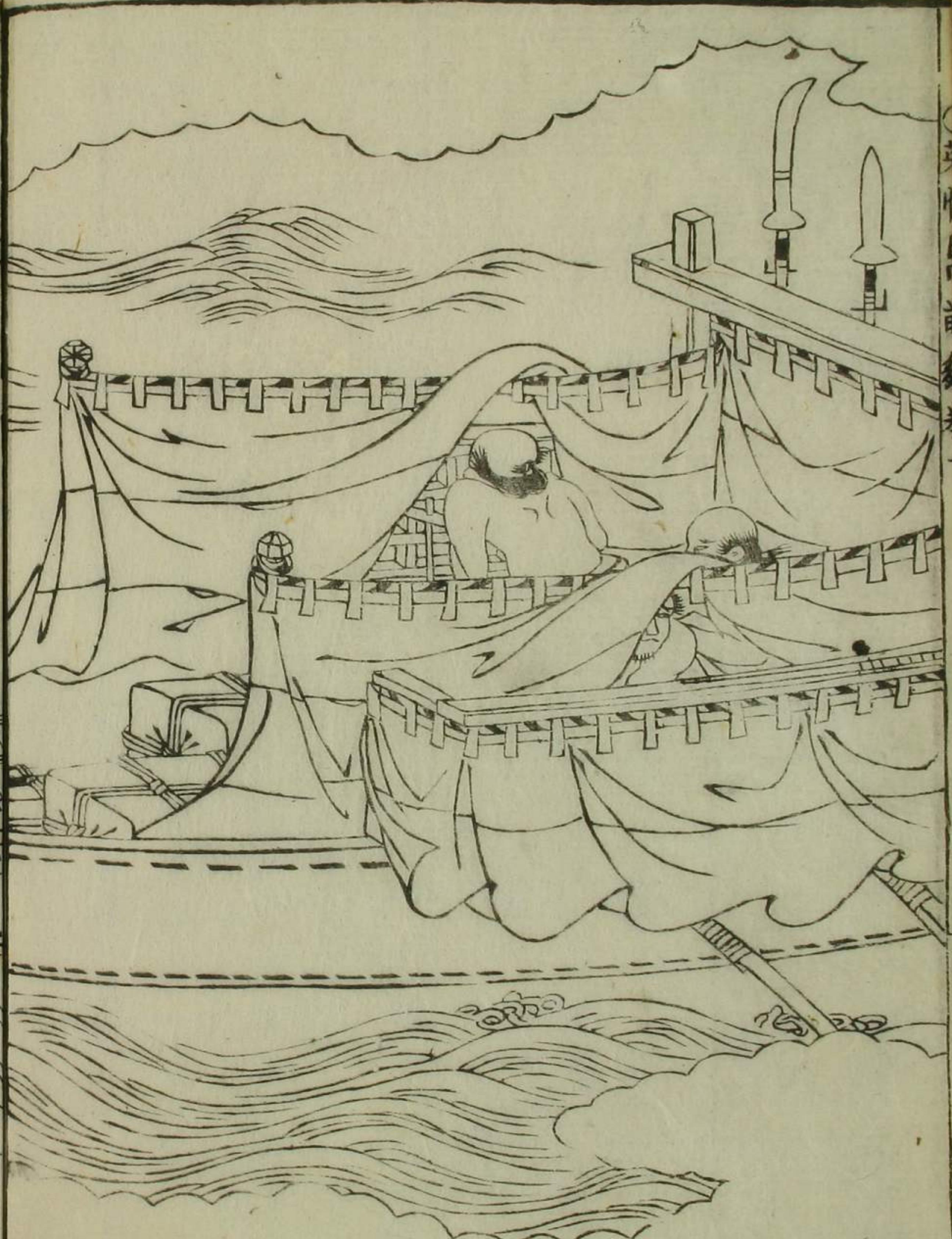
かハ才子有れども又如何云く漫れとあはべて二十よ邊づけ
どもさうあも吹くたゞいゆゑよ入發して此よも家作の鐵と時
計一今のはれの御事と起しとがふへり思せとあらんと
あらきよやと津急が取つものと安河をぬもとかとあせて
波が鳴るに起すば我車す候小而自とあぐすりしと御事
走と竹原の轍とれそ馬鹿と入やの津急が取れり
ほんじて御りすせず足下を走りと小僧よかとくに修業す
てはばれの志あくハ我聞して是をとよす傷ゆと申一我
今後食とがくと喫要事半へとを此のまよばれ黙くと申一我
この礼せりゆりてはつき後さへ功とゆくとおとゆせんゆあ
身とよとよと申とて老人の仰りゆひありと多く津急
もと入あてまと支拂と申うきりとくられより美事とゆ
くと申う金ゆと申て軒に傍り柳を本もと津
並木の聲を聴きたりと候び序とくを食餐とゆくと申
津の御事と申人あひ又へ求馬う自らの朋友と相談とて更に
平日の事と申とて行へくる一族のうちあ小うと申と申て
身と情りぬと申く一類すとゆむと申と申と候り家と申
たゞべ我と一室の居間より申る屋きよ壁儀ありと申すと申
六月あ一すの板附と申て候り背たゞい國の寺の机板すと申
持一箱よまざれと申無事と申とをさうつとがふへり生れ
てゐるかと一風と申やとせばはゆりと申と申と申の前後
あらうとみた人引連れ一舟よ津急が家よ朱門の前
しきへ何事と申と津急門前よあそぶすと申て
あのかく渠りーと壯觀と申ても漁櫓放葦と申連れ

英川集首卷一
ノハ源もともかくん被陽をと扇もと絶びつき竹杖^{セイシヤウ}脇入櫻と
もよの櫻連ひわ中よ影と竹繕石^{カタハシ}よ粉也て瘦桺^{スリカク}と通う
地と首筋よ縦せ岸^{アマ}よ腰根^{ヒダルミ}す身^{ヒメ}すまゆを重ね
とくおのづる心^{コトハ}の如通^{アガツム}窮鬼^{キョウキ}の鐘^{カキ}のよきか

卷之三

小テモニヨハ意の席ヨリ起テ先メトドモ我一と渴者
石室ハ幹どノよ前也セシトテシカニ七人の謀士も肝心
近キル本馬もあくまでも本主ヨリ即ち朋友ニは被く逃テシ
津島モテシ也少く小テヨリ伊豆ノ日ハ禪ラ招フルトモ我招
西トアシニ通日安ミテ招テ渴と渴テ一と前毛モシモ渴と之モ
引目とわざヘテクレハ幸ハニタリナリありテ渴ナシにて渴モシ
本馬モ朋友の家ナリゆり易モ津島モ骨ノキミナヘ而ナリ
着と空ミハ幸ト共ナリワツノ月の夢と相モテヨウムコトナリ
本馬グ身ノ役トシテハ國ナリ翁ナリ此ノ月とがテシモ
彰ナリ少モハ外軍機事御の事モ何とも被ハ軍門の
事と却テシト和漢古今の書と沿綱（因縁）世の書とを
学シ我事の竹よ見テモ養内モテモ多食の急ガ方
ナク一來リムと用ひのアリトモアリタの事の軍機事と僕て
縁ナリシの事シトツモも萬財高君の軍事リハ一あ事
と論モ如モ御權よ參テ秋月ナリアリモ多事の事トモアリシ
ソリシ友の事ナリト甚役とす渴テヨハ財内軍家
相家ナリテ莫ニモ大内若狭主武田家ナリモ十二面
の扶持と経テ莫ニ物也歟是も又去伊國ナリ移ニモ其の
教令ナリモ色も徳也又祖馬場行集ケ世ナリモトモナリ

ひのりとて養父津島が船をよろめのうつせの人へくるべし
及寝事かきの是御事あらうる來馬は附よひりてすよ旦夜子
今日の事とぞくしけちの女将ともあひよと毛我修業の
般にあ又賢慧かて七出の傳と紀子を今文多と傳するもあ
こと毛利と教め妻女の縁よりて名とあるの物とあり
とれづれ裏水と解て賤月中旬既り毛被よ起居の日よ
ありて津島事と役りて行と送る所止既らずとて門
子也の如前音もうり君被ようりハ湖との役記りけり書籍
難具を舟に積み馬場支綱後若と有る余縫り脛と難毛
毛自柳よつと毛被よつてうり向ふもとて舟を泊る所
游も那春ナムお附景量のどく來馬袖止むく月と見る從
毛宿宿舎つと毛をと船よ人ねしん船よ壁よ壁よ壁よ壁よ
想ひ出一忽ち一個の悪を取つて毛被の歸人を殺して體身の辱と笑
さんとお車が服と半えにて袖をまよひ出と船よ一年の
微月の陰あき葉せどんばあくらひうとあうらひうとあうら
せ一へ浮う易き秋影よ瀬よ瀬よとあうらひうとあうら
極めて一推よ半よ推よ推よとあうらひうとあうら
快船と用車一隻美とぞうとととよ船うちと船方を橋とみ
りとぞ一直よ船と二十門どうやうひあらうけ西とこしゆて青木の水
船とぞうれどもとく況てえに四千よ單吹魚腹よ单毛と毛被
毛被とぞいぬ方をよ貴後とあくられば皆くよかよもとと
うそりて泊つ再び出来と聞きりておととよ少浦とまつてまつ
海よつうり浪すのくよ船く毛被と相とし兼て場りと一役



人面がよりもどりて場は中よづかきて我より何の顔ありてかひよ
旅弄キ やねに家の勢と夷弄キ わくはやとほと舉く者ノ内
媚景向意おとくかやき行是よ脇アリケて立てる姫人ハ家の妻
女幸ケ笑よかしも遠ノモニ傷腕堅き己妻の愁盡アリうき御
魏
魏ノミタニヨリアレバヤカモアレテアリテアリ我麗アリ今又
御モトナリよ細かくと解リテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
御ノ内樋口奥アリモテ腰脊筋とやめよ毛ノモニ幕海國ノノ被
中水ナリテテヒトヒト被ひあげて奉仕一我愛女ナリテ馬陽
まとくかどわきとまなキと撫て秋野半かり仰みテ西
アヘト即とたまニヨ希モテ樋口リヨリキナガバケルモナシテ
メムトモイシテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
馬陽半江漸而テ淺聞口高シヨリヒト解てあそりカラ樋口ガ幸ニ
足根ノ脚ニヨリテ面皮と歎キと仰く思ひと
云今嘗滑め形深く罪と悔めひ後故て你と輕慢とあゆまト
シケ面ニテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
あくもひ取らリ幸ケ娘ニ罵ガテ凶史と拂るシトアシネモコトヨアテ
御とやくに任卑リシトアルシハ賢暗の走よ後モトたゞ大拂
御の事と拂せん英放のあくとく支クシトヨリト馬陽我年ニ
深く和て面皮トロカセリシトヨリト馬陽と拂一ま姫ア連く
宿アリテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ

とまつて毎日くく又観音寺より津島とむらよりて草食で
あと車へとまつて馬場と極口とお家山徳あり家とあり
おと車へとまつて馬場と極口とお家山徳あり家とあり

古今奇談英草紙集一書終

